The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宮城菊の歴史経験と基隆「水産」地域 : 経験のゆくえ・東アジア・生存のかたち
Author(s)	冨永, 悠介
Citation	大阪大学, 2016, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/55693
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　冨永悠介　）	
論文題名	宮城菊の歴史経験と基隆「水産」地域 ———経験のゆくえ・東アジア・生存のかたち———

論文内容の要旨

本論文は、宮城菊（1922-2013）の軌跡に即した経験の歴史研究である。

宮城菊は沖縄県那覇市に生まれた。自らを〈琉球産〉と呼ぶ菊は、幼い頃から家が貧しかったため数え年9歳で辻の遊郭に〈売られ〉、その後、沖縄本島内の料亭を転々とさせられている。菊が5年契約の旅館女中として帝国日本の植民地だった台湾に〈売られた〉のは1936年だった。菊は1941年に契約の満期を迎えているがアジア・太平洋戦争の影響で沖縄に帰ることが出来なかった。そして、1944年に戦時徴用工として台湾に連れて来られた朝鮮出身の鄭用錫（1923-1989）と出会い、結婚。二人は戦後も台湾に残り、本島北部の港湾都市・基隆に位置する「水産」と呼ばれる地域で半世紀近い時間を過ごしてきた。

本論文では、菊の個人史を記していく際、歴史学者の大門正克が提唱する「生存の歴史学」を研究方法とし、(1)移動、(2)場、(3)経験を分析枠組みとした。そして次のような論点を設定した。

第一に、菊と用錫の出会いは、その後、どのような経験として展開したのか。換言すれば、それは、出会いという経験のゆくえを辿ることを意味している。第二に、出会いのゆくえを含む菊の経験と基隆「水産」地域はどのような関係性にあるのか。すなわち、経験と場の問題が二つ目の論点となる。そして、以上の論点を念頭に置くことで菊の生存のかたちを照らし出すこと。これが第三の論点となる。具体的には、宮城菊という一人の個人がその時々の生活環境・人間関係・時代状況に翻弄されながらも、自らの半生をどのように捉え返し、また、自らの生を切り拓いてきたのか。菊のキリスト教信仰に即しながらその過程を辿ることで、菊の生存のかたちを照らし出した。

本論文は、第一章から第六章までの全六章で構成される。各章の概要は以下の通りである。

第一章では菊の幼少期から植民地台湾における鄭用錫との出会いまでを論じた。

先述したように本論文は菊の経験を中心に据えている。その意味において、本章で論じた菊の経験がその後、どのように展開していったのかが枢要な論点となる。本章では主に、辻の遊郭で習った琉球舞踊、植民地台湾における琉球人差別、旅館女中／芸妓の狭間という経験、そして、用錫との出会いについて論じている。

第二章では、菊の経験と密接な関係にある「水産」地域の形成と発展を辿る。

「水産」地域の歴史を紐解けば、三沙湾漁港の移転事業に遡ることが出来る。三沙湾漁港は元来、基隆港内に位置していた。しかし、漁船繋留能力の拡充と基隆港の機能回復という理由に、コレラ発生の懸念・港の美観・三沙湾漁村の窮状緩和という新たな理由が相互に関連し合う状況のなかで、基隆港から三沙湾漁港だけを切り離す移転事業が選択されていった。そして、当時、濱町・社寮町と呼ばれていた地域一帯に、三沙湾漁港にかわる基隆漁港が新設され、その周辺には、近代的設備を兼ね揃えた水産業関連施設が凝集されていく。以上のような経緯で「水産」地域は形成されていった。その過程を辿る際、本章では三沙湾漁港の移転を正当化した行政側の論理及び開発先に従来暮らしていた人びとの存在に留意しながら論を展開した。

第一章で論じた菊の経験はその後「水産」地域とどのように絡まり合っていくのか。これが第二章以降の論点となる。だが、この問題に立ち入る前に第三章において映画『無言の丘』の考察を行った。なぜなら『無言の丘』が試みた歴史叙述の可能性は経験の歴史研究を目指す本論文の方向性と軌を一にしていると考えられるからである。

『無言の丘』は1920年代の九份・金瓜石という鉱山街を舞台とする。そして出身・性別・階級・境遇の異なる労働者が繰り広げる人間模様を描く。それは、日本人を頂点とする階級構造を前提としつつも、台湾・沖縄・朝鮮・中国からの労働者や混血児が織り成す流動的で可変的な交流の諸相である。こうした異民族間の交流や九份・金瓜石という場に着目することで台湾から様々な地域へと接続・越境していく歴史叙述の可能性を考察した。

第四章では、菊と用錫の出会いが戦後「水産」地域の暮らしのなかでどのように展開したのかについて論じた。

戦後「水産」地域は、沖縄・朝鮮（韓国）出身者を中心とする多民族集住地域だった。それと同時に中華民国政府軍が駐留する場でもあった。そうした特徴を持つ戦後「水産」地域において、菊と用錫は排外主義の煽りを受ける。

端的に言えばそれは、帝国日本から冷戦体制へと連なる時代変遷の影響によって「水産」地域における民族・国家・性別などの境界線が引き直されたことに起因する。また、菊は戦後「水産」地域において神経症を発症している。

第五章では、喜友名嗣正（1917-1989）という人物に光を当てた。

喜友名嗣正は、戦後「水産」地域を拠点にしながら琉球独立運動を展開した人物として知られている。しかし喜友名が代表を務めた「台湾省琉球人民協会」の活動についてはこれまで知られてこなかった。本章では、喜友名が残したテクストや菊の証言を織り交ぜることで「琉球人民協会」における喜友名の活動について論述した。それは戦後台湾において「棄民的状況」に置かれた沖縄出身者の生活を照らし出すことになるだろう。

第六章では、菊のキリスト教経験について論じた。

菊は戦後「水産」地域の暮らしを振り返り〈もう死んだらいい〉と回想している。そのような生活から菊を救ったのがキリスト教だった。菊は1972年にキリスト教に入信している。菊は聖書の内容をより深く理解するために読み書きを習い始め、その文字を駆使してその時々の出来事や思いを書き留めるようになる。筆者はそれを総じて「菊さんノート」と呼んでいる。本章では、その「菊さんノート」に依拠しながら、用錫との出会いがどのように綴られているのか、そして、菊がキリスト教の観点から自らの軌跡をいかに捉え直し解釈していったのかについて考察した。

終章では、現在の「水産」地域について言及した。また、2013年9月の菊の死去とその翌月に開かれた「宮城菊姉を偲ぶ会」について述べた。

「水産」地域の現在を考える際の観点として生活文化に着目した。具体的には「水産」地域における言語使用、「水産」に位置する「基隆韓国教会」という場、2011年に建立された「琉球ウミンチュの像」に焦点を当てた。次に、2013年10月に那覇市首里に位置する「石嶺バプテスト教会」で開かれた「宮城菊姉を偲ぶ会」について言及した。「偲ぶ会」では、生前に菊と親交のあった信徒たちが各々にとっての菊について語り合う場が設けられた。そうした複数の語りは、生物学的な死の意味を超えて菊が「石嶺バプテスト教会」の人びとの間にあることを照らし出した。「石嶺バプテスト教会」で幾多の人びとと出会い、交流を積み重ねてきた菊の生存のかたちを「偲ぶ会」という場から照射した。

本論文では宮城菊の個人史に即した経験の歴史研究を目指してきた。そして菊の経験が照らし出す歴史を一国史的な枠組みではなく、台湾・沖縄・朝鮮（韓国）・日本などが相互に絡まり合う関係史として、また、歴史の波頭に顔を覗かせることのない他者との交流史として位置付けた。また、人びとの経験から様々な地域を越境・接続していく歴史を構想する点にこそ経験の歴史研究の方向性と可能性があると結論付けた。

様式 7

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　冨永　悠介　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　大阪大学　教授	杉　原　　達
	副 査　大阪大学　教授	川　村　邦　光
	副 査　大阪大学　准教授	宇　野　田　尚　哉

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

様式 7 別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目：　宮城菊の歴史経験と基隆「水産」地域
——経験のゆくえ・東アジア・生存のかたち——

学位申請者　　冨　永　悠　介

論文審査担当者
主査　大阪大学教授　　杉　原　　達
副査　大阪大学教授　　川　村　邦　光
副査　大阪大学准教授　　宇野田　尚　哉

【論文内容の要旨】

本論文は、宮城菊という女性の生きた軌跡をたどることをめざした歴史的研究である。菊は 1922 年に沖縄県那覇市に生まれ、1936 年に旅館女中として台湾に渡った。アジア・太平洋戦争の激化の中、基隆で、戦時徴用工として台湾に連れて来られていた朝鮮出身の鄭用錫と結婚し、戦後も基隆の「水産」とよばれる地域で暮らした。晩年の一時期は沖縄にも滞在したが、2013 年に基隆で死去した。序章では、人の移動、場（関係性としての地域）、経験という 3 つの観点から、広く関連分野の先行研究を整理した上で、生きることを歴史的諸条件と関わらせて議論することをめざす生存の歴史学という分析方法に基づいて、菊の経験を記述することを明確にする。

第 1 章では、沖縄での幼少期から基隆における鄭用錫との出会いまでを記述する。1920 年代、「蘇鉄地獄」と呼ばれる不況に翻弄されながら生き抜くしかない状況に直面した菊は、辻の遊郭で琉球舞踊を習い、その後台湾に渡るが、同地における琉球人差別や、旅館における女中と芸妓の重なりなどを経験し、台湾内を移動する中で戦争末期に鄭用錫との出会いを果たした。

第 2 章では、菊が生活の基盤を置いた基隆「水産」地域の形成と発展を論じる。1920～30 年代にかけて、基隆港では、港としての機能拡充を図ることに加えて、コレラ流行への恐怖、美観整備、漁村の窮状打破といった理由から、基隆港内にあった三沙湾漁港を移転し、当時は濱町・社寮町とよばれた一帯に基隆漁港が新設された。ここは「キャピタリズムの騒音地」と呼ばれたように近代的漁業施設が整備された地域であったが、それと共に、この漁港が漁民部落のクリアランスの結果として成立した経緯にも注目する。

第 3 章では、1920 年代の台湾北部鉱山街を舞台とした映画『無言の丘』を考察する。この映画には、植民者を頂点にしたピラミッド型の構造を前提としながら、出身、性別、階級、境遇の異なる民衆が幾重にも重畳する関係の中を生きる姿が描き出されている。序章で指摘した人の移動、場、経験という 3 つの観点から作品分析が試みられ、もう一つの「水産」地域へと歴史研究の視座を開いていくための方法論的提起の章となっている。

第 4 章は、菊と用錫の戦後「水産」地域における暮らしぶりや、この地域の特徴を、各種の統計、文献資料、聞き取りなどから明らかにする。同地域には、沖縄・朝鮮（韓国）出身者、台湾系漢民族、外省人、台湾先住民

族らが暮らしており、住民自らが「国際部落」と呼ぶほどに多彩な接触が見られた場であった。と同時に、菊と用錫は国際結婚であるが故の分断や排外のまなざしも受けることになった。本章では、帝国日本から冷戦体制へと接続する時代状況が個人の生活経験に否応なく影を落とす様子が記述されるとともに、菊が心身に病を抱えるに至ったこと、そのときの支えの一つになったのが琉球舞踊であったことが明らかにされる。

第 5 章は、喜友名嗣正を論じる。喜友名は琉球独立運動の活動家として有名であるが、彼が戦後「水産」地域で「台湾省琉球人民協会」代表として活動したことについては、ほとんど知られていなかった。ここでは、喜友名が残したテクストや菊の証言などを活用して協会の活動を紹介し、戦後台湾においていわば棄民的状況に置かれた沖縄出身者の生活の具体的な諸側面が論じられる。

第 6 章は、菊のキリスト教との出会いとその実践をテーマとする。第 4 章で示された菊の心身の困難を融解させたのがキリスト教であった。近所に住んでいた韓国人伝道師に導かれて、菊は 1972 年に基隆韓国教会で洗礼を受ける。菊は信仰を深める中で、聖書の内容を理解するために読み書きを習い始め、時々の思いを記すようになった。本章では、それらに基づいて、用錫との出会いや自身を振り返る菊の精神史的軌跡をたどった。

終章では、「水産」地域の現状および菊の死去と沖縄で開かれた「偲ぶ会」について述べるとともに、全体を概括し、今後の課題を整理した。

【論文審査の結果の要旨】

以上の内容をもつ本論文の特徴の第一は、宮城菊という一人の人物のかけがえのない経験に寄り添いながら、詳細な聞き取りを行うとともに、当人に関わる個別資料を発掘し、さまざまなレベルの周辺資料を総合的に分析して、分厚い記述を実現した点にある。書くという習慣から離れたところで生活を重ねた個人の場合、当人に関わる資料を収集することは容易ではない。申請者は、菊との長期にわたる付き合いの中で、当人の残したメモ類に出会った。それらは、断片的な形で、ノートや紙切れ、封筒などの余白に記され、出来事や思いが書き留められたものである。それらを「菊さんノート」としてとらえ直し、そこから当人の信仰との出会いや深化の過程を、また自己省察の過程を慎重に分析し明らかにしたことは、きわめて貴重な研究成果と判断できる。

特徴の第二は、宮城菊が人生のもっとも長い時間を過ごした台湾の基隆における「水産」地域という場に即して、彼女の経験をさまざまな人間関係や歴史的な条件の中に位置づけようとした点にある。この地域の形成と変遷を丁寧に検討することによって、菊が引き受けた制約と主体的選択との複雑な在りようを具体的に浮かび上がらせることに大きな成果をあげたといえよう。またそれに接続する形で、宮城菊という個人経験を、沖縄、台湾、朝鮮（韓国）、日本が相互に絡まり合う複雑な関係史の中に位置づけ、東アジアのスケールにおいて人の移動と文化の交流・摩擦の構造的把握を研究していくための一つの橋頭堡を樹立した点が評価できる。

とはいえ、いくつかの問題点も存在している。宮城菊周辺の人びとを含む台湾在住の沖縄、朝鮮、日本出身者（琉僑、韓僑、日僑）の歴史的全体像については、なお明らかではなく、資料の収集と分析が望まれる。また東アジア関係史の中への個人の歴史経験の位置づけについては、方法的彫琢の深化とともに、本論文で検討された喜友名嗣正も含めてヨリ詳細な個別の調査研究が求められるであろう。しかしこれらの点は、いずれも今後の課題であり、更なる研究によって克服が期待できるものである。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。